アトリエ訪問

第26回

杉戸洋

画家

杉戸洋が描くのは、空や家、果物、木などの
身近なモチーフだ。それらを独自の視点で再解釈し、
具象と抽象を行き来するかのような、
軽やかなタッチで描いた作品は多くの人々を魅了している。
作品のアイデアはどこから生まれてくるのだろうか。
名古屋のアトリエに伺った。

撮影 永野雅子





上／机の前に置かれたソファ。
ここから壁の作品を見渡すことができる。
左／机は定期的につくり直している。今回は正方形にし、
立ちながらでも描ける高さに調整したところがポイントだ。

「絵を描くことは、やっぱり楽しい。」

名古屋市で生まれた杉戸さんは、なじみのあるこの地に3軒のアトリエを構えている。市内の工場が立ち並ぶ一角に、工場を改築したというアトリエは建っていた。扉を開けると、鮮やかな色彩が目に飛び込んできた。

――入った瞬間、壁一面に掛けられたたくさんのキャンヴァスに圧倒されました。

杉戸　実際はここに飾ってあるよりも100倍の作品があります（笑）。レコードショップで、山積みにされたレコードの中からお目当てのものを漁（あさ）るような感覚で、定期的にいくつかランダムに選んで飾っておく。そうすると忘れていたものとかが見つかって、新たに制作のヒントを得られたりするんです。いくつかアトリエを構えていますが、ここがいちばん、自分の頭の中に近いかな。

今はこんな感じですが、年度末の大掃除では全て取り払うんですよ。目の前にあるよりも片づけたほうが、絵が見えてくることもある。絵を見るというのは、一生懸命その絵を見るのではなく、ずっとそこにあった絵を当たり前のように眺めていて、片づけられたときにはじめて、「あ、寂しい」と思う。そういう見方もあるのかなって思います。

本当はこのアトリエを、絵を描く場所ではなくて、見るための場所にしたい。ソファに座って、携帯電話の電源も切って、ぼーっとコーヒーを飲みながら、ただただ自分のことだけを考えて、作品と向き合えるようなゆとりのある時間が欲しくて、つくったアトリエですから。

――この大きな机で制作するのですか。

杉戸　立って描くことが多いですね。いつもソワソワ歩き回っています。勉強机、食卓、こたつの低い机で描くのって、それぞれ感覚や意識が違うじゃないですか。低くなればなるほどリラックスできる気がします。

この机は手づくりなんですよ。変なこだわりだけど、1、2cmの高さの差は感覚的に違うんですよね。絵もそういうところが気になっちゃって。モチーフの位置や構図があと1cm右なのか、左なのかで受ける印象が変わる。絵の中だけではなく、生活空間でも常に考えています。

あとは制作時に使う道具類も、僕にとっては重要です。例えば紙。お気に入りのタイプライター紙があるんだけど、製造中止になってしまって……。鉛筆も、キャンヴァスを張るための釘も、好きなものが次々と廃盤になってしまうので、必死に探して一生分買いました。小さなことだけど、ちょっと気を遣って、自分の感覚に近いものを見つけることは大事だと思います。

――大きなイーゼル（表紙参照）も印象的ですね。

杉戸　かっこいいでしょう。このイーゼルを使って描くと、まるでレンブラントになった気分になれます（笑）。制作でも使いますが、作品を立て掛けておくのにも使用しています。このアトリエの壁は、パソコンでいうとデスクトップ画面のようなイメージ。イーゼルに作品を置くと、自然とその作品に目がいき、周りが見えなくなって集中できる。デスクトップ画面から一つ選んでクリックするのと同じ状態です。カメラでいうと、広角レンズに近いかな。自分が見たいものが中心に大きく存在して、その他がぼけているようなイメージを頭の中につくるために、イーゼルは使います。もしかすると、絵筆を動かしている時間よりも、ちょこまかと自分の作品を動かしている時間のほうが制作に近いのかも。

――制作時はどのようなことを意識しているのですか。

杉戸　絵を描くという意識をなるべくもたないようにしています。絵は「絵を描くぞ」と意気込めば意気込むほど、汚くなってしまう気がして。僕が目ざしているのは、「トイレの落書きの名作」。電話横のメモ帳とか、トイレの落書きとか、意識が絵を描くことに向いていない線や色に魅力を感じます。理想は、なるべく手数を減らして、10分でちゃちゃっとできちゃったような絵が描きたいんです。例えば、これ（何の変哲もない茶封筒を指して）が自分の作品だったらいいのにって思います。だけどこれだけでは、僕の作品だと言えない。そう言うために、どのように自分らしさを加えていくかをいつも試行錯誤しています。僕の作品を観た人から、「簡単に描けていいですね」と言われると嬉しいです（笑）。

今はスマートフォンやAIがいろいろやってくれる時代だけど、絵はそれではいけないと思います。過程が大事なんです。作品は誰に見せるためでもなく、結局は自分のためにあるものですから。地味なことだけどやめられないことですよね。時代がどんなに変わっていっても、やっぱり絵を描くことは楽しいです。



ドローイングではトレーシングペーパーを使うことが多い。
「優柔不断なので、重ねながら構図や大きさを考えられるのが便利です」。



アトリエの随所に、果物や野菜を
樹脂でかたどった立体が置かれている。
「例えばリンゴを描きたいときは、まず実物の
リンゴを樹脂でかたどったものをつくり、
それをモチーフにするんです。そうすると、
絵の雰囲気が軽くなる気がして」と杉戸さん。



棚に飾ってある置き物は、15年ほど前に骨董店で見つけてきたもの。木の質感にひかれたという。



すぎと・ひろし
1970年愛知県生まれ。92年、愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。第68回芸術選奨、文部科学大臣賞受賞。主な個展に、「こっぱとあまつぶ」（豊田市美術館・2016年）、「杉戸洋 とんぼと のりしろ」（東京都美術館・2017年）など。現在、東京藝術大学教授。光村図書高等学校『美術』教科書の編集委員。